

八ヶ岳 横岳 石尊稜

【日時】 平成28年12月18～19日

【メンバー】 Y川 (L)、T

【概要】

18日

夕方に美濃戸口に駐車し、赤岳山荘まで歩いた。山荘は素泊であったが、自家製の野沢菜漬けとお味噌汁を頂戴し、コタツ付の個室でのんびり過ごし明日への英気を養った。

19日 快晴

朝5時半に赤岳山荘を出発する。北沢登山道を辿り、赤岳鉱泉には7時15分到着。すでに立派なアイスクャンディーが出来上がっている。さすがに人気は少なく、閑散としている。大同心稜単独の方と言葉を交わし、ハーネスを付けて7時40分に出発する。中山乗越へのトレースを辿り、ネットの資料にある最初の橋に到着する。トレースが沢添いに付けられているが、上の道標から沢に入ることとする。しかし、道標から沢へのトレースは無く、強引に沢のトレースに合流した。トレースどおりに沢筋を行くと三叉峰ルンゼに入り、F2に至る。見事に氷結しており、ここから右斜面にトレースが付けられている。これを辿り、雪壁を登ると下部岩壁の取り付きに到着した。

下部岩壁の取り付きは狭く、雪壁手前でロープを付けた方が良いかもしれない。左ルート、右ルートの取り付きにはスリングがかけられており、左ルートを選択する。スラブ壁に雪と氷が乗った状態で、1本目のペツルが確認できた。ホールドおよびスタンスとも甘く、バランスで登る。3本目のペツルまで支点が取れたが、そこから先は雪が載っておりルートが分からず、トレースも見当たらない。ピックを打ち込むと雪の下はほとんどの所がスラブで、雪を払いのけつつ直登すると、上部にペツルが出ていたのでそこでルートを観察する。資料で「左にバンドをトラバース」、とあるのはここかもしれないが、雪がべったりと付いており、支点が取れそうにない。上は小灌木の生えた雪壁であるため、小灌木で支点を取り直登することとする。あいかわらず雪の下はスラブで、ピッケルとバイルの先を引っかけて登る。下部岩壁の上部までほぼこのような登りで、最後は立った岩場を3mほど登りしっかりしたダケカンバでビレーした。約45mであったが、今まで経験した積雪期八ヶ岳バリエーションの登りと比較して、最も難しく感じた。ここからは左のリッジに移るが容易で、リッジ上にはトレースが付けられていた。多分、降雪により部分的にトレースが消滅しているのであろう。約15mで安定した雪稜となり、木の根でビレーして下部岩壁を終了した。

かなり時間を使ったので、ここからはコンテで行くこととする。しばらくするとトレースは消滅し、ラッセルしつつ登る。途中の小岩峰は右から巻き、雪稜上では股までのラッセルで速度も落ちたが、天気が良いのがなぐさめであった。上部岩壁の手前で、左の三叉峰ルンゼから上がってくるトレースが合流した。登攀中、左側からコールが聞こえており、三叉峰リッジにもトレースが確認できた。どうやら三叉峰ルンゼで氷瀑を登攀した後、三叉峰リッジまたは石尊稜の上部岩壁から主稜線に抜けている模様である。やがて、残置ロープがある上部岩壁取り付きに到着、少し休憩した。ここから、凹角状のミックス壁に取り付く。ホールドはしっかりしており、下部岩壁より容易である。ただ、残置は少ない。岩稜上の2mほどの立った岩峰から右手にトラバースすると残置で支点が取れ、そのまま右手の浅いルンゼに入る。ダブルアックスで15mほど登って岩稜上に戻り、計35mほどでピナクルを使いビレーした。ここからは左手のガリーに入り、狭い箇所を抜けると広い雪氷のルンゼとなり、約45mでピッチを切り露岩でビレーした。もう稜線の直下で、ここから30mほどで石尊峰頂上に出た。360度見渡すことができ、すばらしい眺めであった。縦走路を辿って地蔵尾根より行者小屋に下り、南沢登山道経由で美濃戸に下山した。

石尊稜は易しいと既述されている資料もあるが、雪の状態により下部岩壁は厳しくなるものと思われる。傾斜がきつくないため雪が積もりやすく、そのため、支点が埋もるとランナウトを覚

悟しなければならない。初級者のみで取り付くのは危険ではないかと感じた。

赤岳山荘 5:30 赤岳鉱泉 7:15~7:40 下部岩壁取り付き 8:50~9:15
上部岩壁取り付 11:55~12:15 石尊峰 13:05~13:20 地藏尾根分岐 13:45~13:54
行者小屋 14:25~14:50 美濃戸口 16:58
ロープ 9mm×50m 1本 ヌンチャク 4 スリング 120cm4本 60cm4本 カラビナ 8枚



三叉峰ルンゼ F2 から下部岩壁への斜面



下部岩壁 1 ピッチ目上部をフォローするTさん



上部岩壁を見上げる



中間の雪稜



上部岩壁 1 ピッチ目のルンゼ



最高の天気でした